

## 自制一致の法則とは・・・

自制の一致とは『主節と従属節が存在する文章』において主節の時制と従属節の時制を合わせる事を言い。具体的には、主節の時制が過去の時は従属節も例外を除いて過去の時制にする事を言います。主節とはその文のメインとなる部分で従属節とは主節の中身にあたる部分と言います。

例えば下記の例1)と例2)が『主節と従属節が存在する文章』です。

例1) I think he can finish the task quickly. 私は彼はその仕事を素早く終える事が出来ると思っています。

- 主節：I think

- 従属節：he can finish the task quickly

例2) He says he will participate in the meeting tomorrow. 彼は明日会議に参加すると言っています。

- 主節：He says

- 従属節：he will participate in the meeting tomorrow

これらの文章の主節が過去形(青字)になると以下のように従属節も過去形(青字)になります。

例3) I **thought** he **could** finish the task quickly. 私は彼はその仕事を素早く終える事が出来ると思っていた。

例4) He **said** he **would** participate in the meeting tomorrow. 彼は明日会議に参加すると言っていた。

これが英語の[時制一致の法則]で、日本語には存在しません。例えば、例1)と例3)を比較して日本語訳を見てみましょう。主節の動詞が”think”から”thought”に変わって過去形になっても従属節の時制はどちらも「その仕事を素早く終える事が出来る」のように現在形です。

ただし『通常の事、いつもそうである事、一般的な事をいう』場合は例外です。

例えば下記の例5)の場合「彼は英語をととても上手に喋れる」のはその時だけの事ではなくいつもそうである事なので主節の”says”が過去形の”said”に変わっても従属節はそのまま現在形です。

例5) He says he can speak English very well. 彼は英語をととても上手に喋れる言っています。

He **said** he **can** speak English very well. 彼は英語をととても上手に喋れる言っていました。

同様に例6)の場合も「戦争を好む人はいない」のは一般的な事なので主節の”think”が過去形の”thought”に変わっても従属節はそのまま現在形です。

例6) I think nobody likes conflicts. 紛争を好む人はいないと思っています。

I **thought** nobody **likes** conflicts. 紛争を好む人はいないと思っていました。

このように「自制一致の法則」は必ずしも厳格に守らなければいけないルールではないようですしこれを無視したせいで全く話が通じないということもなさそうです。しかし日本語にはない考え方なので、会話のレベルを上げるためには意識しておく必要はあると思います。

更に詳しく例文を含めいろいろ知りたい方は『自制一致の法則』で検索して調べてみて下さい

=以上です=